

韓国人と中国人日本語学習者による音象徴語の意味理解

飯田香織（名古屋大学）・玉岡賀津雄（名古屋大学）

要 旨

本研究では、韓国人日本語学習者および中国人日本語学習者の音象徴語理解を比較検討した。韓国人日本語学習者と中国人日本語学習者を対象に音象徴語の意味理解課題と読解テストを行った。収集したデータから、性別・年齢・日本語学習歴・読解能力で同じ韓国人と中国人をペア・マッチング・サンプリング法によって30組作成した。その結果、音象徴語の種類が正答率に強く影響していた。また、決定木分析の結果、半数の15語が読解に影響しているが明らかになった。さらに、言語間差が見られた音象徴語については、いずれも中国人母語話者の方が良くできていた。したがって、日本語と類似の特徴を備えた音象徴語を持つ韓国語を母語とする韓国人日本語学習者の中国語母語話者に対する母語の優位性は見られなかった。

【キーワード】：音象徴語 読解能力 韓国人日本語学習者 中国人日本語学習者
決定木分析

1. 研究目的

1. 1. 先行研究

物体の状態や人の心情あるいは音の響きなどを聴覚的、視覚的、触覚的な感覚印象を用いて臨場感の溢れる具体的な表現を可能とする「音象徴語 (sound symbolic words)」は、日本語になくてはならない語群である (寛 1993 など)。これまで、音象徴語は語に含まれる音韻の音の響きが直接その対象となる物体の性質や状態などを表す言葉 (芋阪 1999、湯澤・松崎 2004) であると主張されてきた。そのため、日本語学習者の音象徴語理解については、音声的特徴からその意味を理解できる側面があるという「音象徴語の普遍性」(田守・スコウラップ 1999:8) を仮説として主に2種類の実験的研究が行われてきた。一つは、日本語母語話者と非日本語母語話者を比較し、音象徴語の普遍的側面の捉え方に音象徴語の持つ音韻が影響していることを示唆した研究である (Imai, Kita, Nagumo, & Okada 2008、Iwasaki, Vinson, & Vigliocco 2007)。もう一つは有声音を大きい対象物、無声音を小さい対象物に対応付けるというルールベースの捉え方を日本語学習者も日本語母語話者と同じように理解できていたことから、音象徴語の普遍性を示唆したものである (王 2011)。このように、音象徴語については、その普遍性について強調した研究者が多いにもかかわらず、それらの先行研究では、「笑い方」に関する音象徴語 (たとえば、/gera gera/ の /a/ は明るい印象を与えるなど) についてだけ日本語母語話者と非日本語母語話者

の間で類似の関係が見られる (Iwasaki et al. 2007) ことを明らかにしていたり、有声音・無声音対比の「重さ」についての意味的側面のみ日本語母語話者と日本語学習者 (インドネシア語母語話者・中国語母語話者) の間で類似の評価が見られたと主張したりするなど (王 2011)、非常に限られた意味的側面に焦点が当てられ、音象徴語を特定言語の特定語彙としてその意味理解の側面から焦点を当てた研究は極めて少ない。

飯田・玉岡・初 (2012) は、語彙として認められる音象徴語の最も典型的な形態は、主に副詞として動詞を修飾する 2 音節反復型である (田守・スコウラップ 1999、田守 2003、羽佐田 2005、Kakehi 1983、Toratani 2007) という指摘に基づき、中国人日本語学習者の音象徴語の理解の特徴を明らかにした。その特徴とは、中国人日本語学習者の日本語能力が高いほど、音象徴語の理解も高くなるというものであった。また、中国人日本語学習者が理解しやすかった音象徴語には中国語でも類似の音象徴語があることが示唆された (飯田ほか 2012)。では、日本語の音象徴語と共通する顕著な形式的特徴 (反復形式) と基本用法 (様態副詞) を備えている韓国語を母語とする日本語学習者の場合はどうであろうか。次節では、日本語と韓国語・中国語の音象徴語の類似性について述べる。

1. 2. 日本語の音象徴語と韓国語・中国語の音象徴語の類似性

日本語に限らず他のどの言語においても、音象徴的な語彙群 (sound symbolism) の存在は認められている (Hinton, Nichols & Ohara 1994)。その中でも、特に韓国語は日本語より豊富であると言われている¹⁾ (秋元 2007 など)。さらに、日本語と韓国語の音象徴語はその多様性や使用頻度の高さだけでなく、言語学的に類似した 2 つの特徴がある。一つは、様態の副詞としての用法が基本用法であることであり、もう一つは反復形が豊富であることである。日韓両言語の語彙として認められる音象徴語は様態の副詞として機能する場合が多い (田守・スコウラップ 1999、李 1998、2000 など)。これは、英語に比べ日本語と韓国語は異なる物事の状態や様子を表す動詞が少ないため、副詞として機能する多様な音象徴語によって動詞を修飾することで、その意味を補っているからだと言える (寛・田守 2003、Hirose 1981、Kakehi 1983、Kimizuka 1967、Lee 2007、Toratani 2006)。たとえば、英語で「笑う様子」を表す動詞は grin、smirk、giggle、cackle、chuckle など多様にあるが、日本語と韓国語にはそれぞれ一つずつしかない (「笑う」「웃 다」)。そのため、たとえば英語の giggle や smirk と同じ意味を日本語で表現したい場合は「くすくす笑う」や「にやにや笑う」のように「笑う」という動詞の前に適切な音象徴語が必要とされる (角岡 2003)。同じように、韓国語でも 웃 다 (笑う) という動詞の前に、様態の副詞として機能する音象徴語を伴うことで様々な笑う様子を表すことができる (例: 낄낄웃 다 giggle, 망글망글 웃 다 smile happily, 싱긋싱긋 웃 다 smirk or grin)。つまり、日本語と韓国語の音象徴語は、それ

自体では、英語の動詞が一語で表せるような具体的な意味を表すことは出来ず、必ず動詞を伴う必要があるといえる (Lee 2007、Shibatani 1990)。以上のようなことから、日韓の音象徴語が語彙として具体的な意味を表すためには、それに共起する動詞が必要不可欠であることが分かる。

日本語と中国語の音象徴語の形態は反復形式が多い (角岡 2003)。また、日本語と中国語は音節構造が近いことから、両言語で非常に類似した音で描写している音象徴語が存在する (たとえば 噔噔 /deng deng/ 足踏みをする音、叭哒叭哒 /bada bada/ 急いでいる足音 など) (角岡 2003、相原 1976)。特に、日本語と中国語の音象徴語は、開音節や鼻音で終わる音節が多い点が類似の特徴として挙げられる (相原 1976)。

1. 3. 音象徴語の意味理解と読解能力との関係

読解のテキスト理解には、音韻・表記・語彙・統語・意味といった言語に関する知識とその技能が必要であり、テキスト内容の理解の仕方には、言語習熟度の高低が影響する。中でも、語彙知識がテキストの内容理解に必要な不可欠であることは明らかである (Huckin et al. 1993、Nagy & Anderson 1984、Nation 2001)。それを受けて、近年、第2言語 (以下、L2) での読解における語彙・語彙知識の働きについて改めて認識され始めている (Horiba 2012、Read 2000)。語彙知識の豊富さは、L2 言語での読解能力を予測する有力な要因である (Huckin, Hayes, & Coady 1993、Nation 2001、Stæhr 2008)。しかし、語彙知識とL2 言語での読解との関係について検討された先行研究のほとんどは、L2 英語学習者を対象に行われたものであった。一方、L2 日本語学習者を対象として、語彙知識と読解能力について検討された先行研究からは、語彙知識の豊富さだけでなく、語の共起関係に関する知識が、読解能力に強い影響を及ぼしていることが示唆された (堀場・山方・西菜・李榮・田所 2012)。前節 (1.2.) で述べたように、音象徴語は動詞と共起することで語彙として具体的な意味を表す (Lee 2007、Shibatani 1990)。しかし、音象徴語の意味理解と読解能力との関係について調べた先行研究はほとんどない。

また、これまで非日本語母語話者を対象に行われてきた音象徴語理解に関する先行研究では、日韓音象徴語の対照研究や音象徴語の限られた意味側面にだけ焦点が当てられてきた。しかし、日本語学習者の第1言語の違いが音象徴語の意味理解に与える要因について実験的に調査した研究は非常に少ない。そこで、本研究では、音象徴語の意味理解は動詞との共起関係を正しく把握できているかどうかによって測定できると捉えたうえで、韓国人日本語学習者と中国人日本語学習者を対象に、音象徴語の意味理解と読解能力との関係について検討する。

2. 調査・分析方法

2. 1. 音象徴語の選択

本研究では、音象徴語と共起する動詞を正しく選択出来た場合に、その音象徴語の意味を正しく理解出来ているとみなす。そのため、刺激語は、形容動詞としてではなく、動詞との共起において使用される音象徴語である必要がある。また、本研究の調査協力者が初級から中級レベルであることも考慮に入れなくてはならない。これらの条件に合致するものとして、玉岡ほか（2011）における刺激語の選択条件および刺激語があることから、これを使用する。

玉岡ほか（2011）に基づく本研究の刺激語の選択条件は、①動詞と共起して使用する音象徴語に絞るため、「形容動詞としては使えないこと」、②特定の動詞との共起関係を明確にするため、「『する』以外の動詞と共に使用されるのが一般的な音象徴語であること」、③語彙として認められる音象徴語の最も典型的な形態は、ひらがなで表記される畳語で（角岡 2007、田守 2002、2003）、主に副詞として動詞を修飾するという指摘に基づき、「様態の副詞（田守・スコウラップ 1999、Toratani 2007 など）として使えること」、④本研究の調査協力者は、初級～中級レベルであるため、「初・中級学習者向けの日本語教材（山本 1993、三上 2007）に記載されている音象徴語であること」、⑤単義または多義音象徴語の違いによって正答率に与える影響を考慮するため、「多義語と単義語の音象徴語がそれぞれ半分ずつ含まれていること」の5点である。なお、玉岡ほか（2011）は、韓国語と日本語の音声的類似性と難易度（正答率）との間に、相関がないことが確かめられた音象徴語を刺激語選択の基準としている。

2. 2. 調査協力者と調査方法

韓国人日本語学習者の調査協力者は、韓国の大学で1年から2年にわたり日本語を学習している韓国語を母語とする日本語学習者43名（女性41名、男性2名；平均月齢20歳9カ月）であった。中国人日本語学習者は、中国華北地域の大学で1年から2年にわたり日本語を学習している中国語を母語とする日本語学習者117名（女性94名、男性23名、平均月齢20歳5カ月；飯田ほか2012）であった。この、韓国人日本語学習者と中国人日本語学習者を、性別・年齢・日本語学習歴・読解得点で、30名ずつでペアーマッチングさせた。本調査は、質問紙形式で行われ、所要時間は約40分であった。

全ての調査協力者に対して、日本語音象徴語の意味理解課題（以下、音象徴語課題）と長文の日本語読解テストを実施した。この音象徴語課題は、音象徴語に共起する特定の動詞を選択することができるかどうかをテストするものである。読解テストに使用した文章は、大部分を日本語能力試験から借用し、日本語能力試験の設問に準拠した問題作成を行なった（財団法人日本国際教育支援協会・独立行政法人国際交流基金 2008）。この読解テストには3つのテキストがあり、1つのテキストについて4つの質

問があるので、合計12問の12点満点となる。音象徴語課題の質問紙には、日本語音象徴語30語の各語に対して正しい意味を選ぶという四者択一問題を提示した（図1）。

10 ちよきちよき	A	<input type="checkbox"/>	遊ぶ
	B	<input type="checkbox"/>	買う
	C	<input type="checkbox"/>	切る
	D	<input type="checkbox"/>	乗る

図1. 音象徴語課題例

3. 分析結果

3. 1. 記述統計量

全調査対象者についての音象徴語課題の記述統計量は、平均値13.00、標準偏差4.40であった。また、全調査対象者の中で、30語の音象徴語のうち最低値を示した音象徴語は「じろじろ」と「ちよろちよろ」の2語、最高値を示した音象徴語は「きらきら」の1語であった。また、母語別の音象徴語課題の記述統計量は、韓国人日本語学習者は平均値11.73、標準偏差5.66、中国人母語話者は平均値14.27、標準偏差6.78であった。最低値を示した音象徴語は、韓国人日本語学習者は「じろじろ」、中国人母語話者は「ちよろちよろ」であった。両母語話者の読解テストの記述統計量は、読解得点でマッチさせたので、どちらの母語話者も平均値4.23、標準偏差2.33であった。

3. 2. 決定木分析

音象徴語の正答率が、音象徴語の種類、調査協力者の母語、性別、読解得点という4つの説明変数から予測されるかどうかを検討するために、PASW Statistics 18.0 (Japanese version) に搭載したClassification Treeを用いて決定木分析を行った。決定木分析は、複数の要因群から予測に役立つ要因を選ぶ手法であり、分析結果は階層別の組み合わせによって構成された樹形図で表される。さらに、決定木分析では、目的変数に、質的変数と量的変数を使うことができる。決定木分析を用いることで、音象徴語の正答率が、これら4つのどの変数の影響を強く受けるかについて、階層的・総括的に明らかにすることができる。よって、決定木分析を分析手法として用いることは、本研究の課題と符合するものであると考えられる。

4. 分析結果と考察

音象徴語の意味理解に関する決定木分析の結果は、図2の樹形図に示した通りである。決定木分析の相対リスクは21.1%であったので、それぞれのノードが78.9%という高い割合で正しく分類されていることが示された。音象徴語の意味理解度を決めるもっとも影響の強い要因は各「音象徴語」であった [F(4,1794)=60.229, $p<.001$]。図2からも分かるように、音象徴語は正答数のノード0からノード1～5に渡る5つの

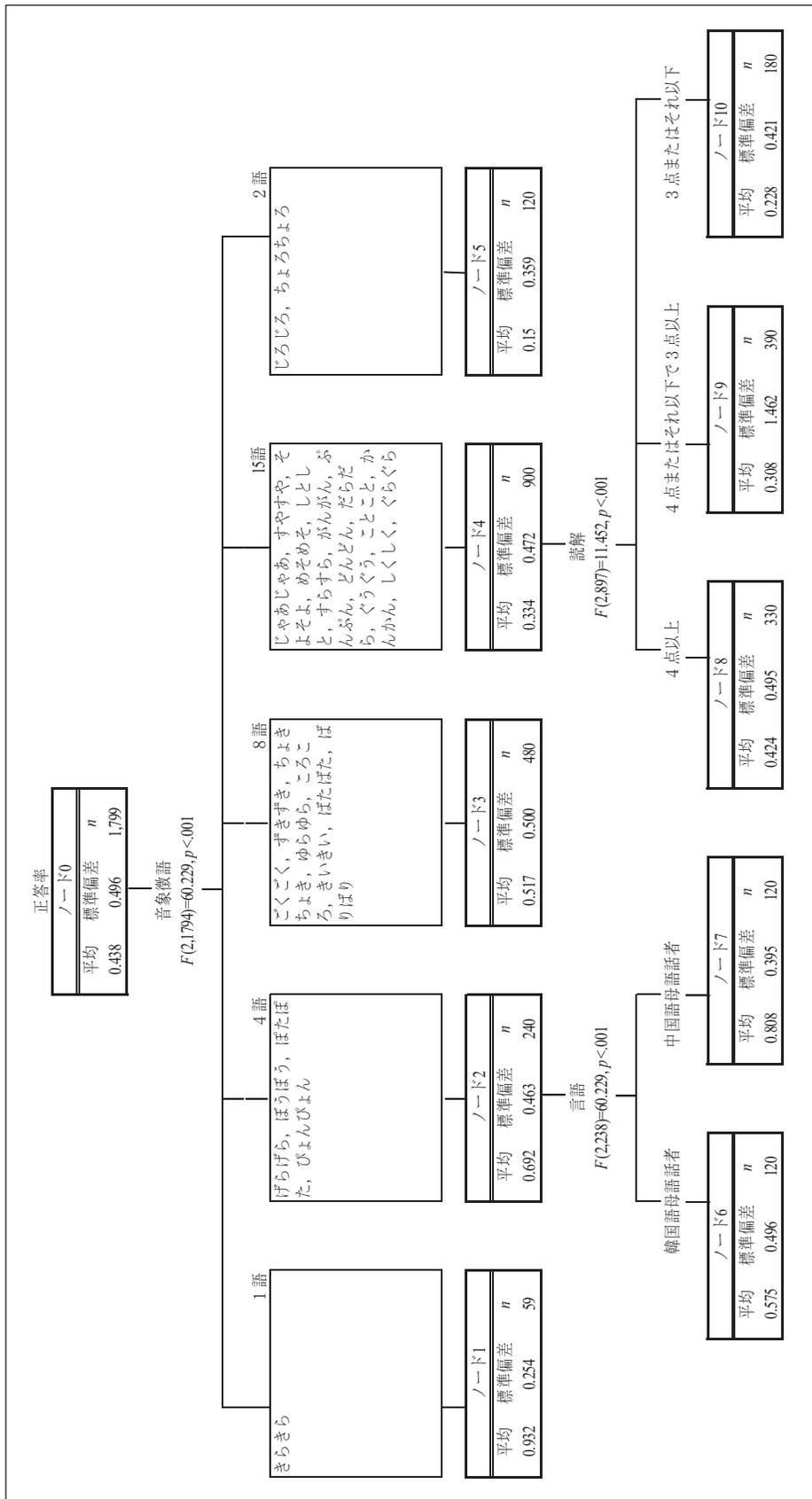


図2. 音象徴語30語の意味理解についての決定木分析

注1：正答率は、小数第3位までの値で示した。平均は音象徴語の30語に対する正答率を示す。標準偏差は、正答率に対する値である。

注2：韓国語母語話者が30名、中国語母語話者が30名、音象徴語が30語なので、全体の頻度は1,800回であり、欠損値は1つだけである。

注3：本決定木分析では、音象徴語の種類、調査協力者の母語、読解能力、性別で予測した。相対リスクの推定値は、0.211である。

枝に分類された。これは、基本的に音象徴語の意味理解の程度は各音象徴語によって異なっていることが示されたためである。たとえば、ノード1の「きらきら」は日本語学習者の第一言語にも読解能力にも関係なく良く理解できたことが示された（正答率 93.2%）。また、ノード2からノード6の「韓国語母語話者」とノード7の「中国語母語話者」に枝が分かれている。これはノード2に含まれている音象徴語の正答率が「韓国語母語話者」と「中国語母語話者」で大きく異なっていることを示している [$F(1,238)=16.225, p<.001$]。つまり、ノード2の音象徴語は、中国語母語話者の方が韓国語母語話者よりも理解度が高くなる（韓国語母語話者：正答率57.5%、中国語母語話者：正答率80.8%）ということが示された。これに対し、ノード4に含まれている音象徴語については、読解能力の影響がみられた [$F(2,897)=11.452, p<.001$]。つまり、日本語学習者の第一言語の違いに関わらず、ノード4の音象徴語理解は読解得点が4点以上では正答率が42.4%と中程度であり、読解得点が3点以下では正答率がランダム確立（25%）よりも低かった（正答率 22.8%）。

5. 総合的考察

決定木分析の結果、ノード2の音象徴語は、言語や読解能力に関係なく、図2のノード1の音象徴語の次に正答率が高かった。これは、両母語話者共に、それぞれの母語に、ノード2の日本語の音象徴語に相当する音象徴語があったことが影響していることが考えられる。まず、韓国語では、「げらげら」は $\text{ㄱㄱ}/\text{kkeol kkeol}/$ 、「ぼうぼう」は $\text{화화타타}/\text{hwal hwal}/$ 、「ぼたぼた」は $\text{뚝뚝}/\text{t'uk t'uk}/$ 、「ぴょんぴょん」は 퐁퐁 という日本語の音象徴語と意味内容が類似した音象徴語があった。同じく、中国語では、「げらげら」は $\text{哈哈}/\text{ge ge}/$ 、「ぼうぼう」は $\text{炎炎}/\text{yan yan}/$ 、「ぼたぼた」は $\text{啪嗒啪嗒}/\text{pata pata}/$ 、「ぴょんぴょん」は $\text{蹦蹦}/\text{beng beng}/$ 、という音象徴語があった。これは、ノード2についてのみ議論すれば、両言語に類似の音象徴語がある場合に正答率が高くなるという指摘（飯田ほか 2012）が、中国語だけでなく韓国語の場合にも当てはまることを示唆するものである。また、エリノア（1982）が指摘するように、ある言語を母語とする者は、その母語の中にある音象徴語的語彙に縛られ、母国語の音声法則に従って音象徴語を理解しているという可能性も考えられる。たとえば、「ぼたぼた」に含まれている日本語の $/t/$ の音は韓国語の濃音である $/t'/$ の音に似ている（鹿島・橋本 2008）。

この、日本語の $/t/$ の音は、Hamano（1998）によれば「ものが地面にあたる音」を表している。同じように炎炎 $/\text{yan yan}/$ を除く、他の全ての音象徴語も中国語にある類似の意味の音象徴語と似た音韻を持っていた。また、韓国語の音象徴語で 퐁퐁 の ㅇ は、日本語の撥音である $/N/$ と同じように、地面にものが当たって跳ね返るという意味を持っている（Hamano 1998、野間 1998）。

ノード2の音象徴語はいずれも $/g, b, p/$ が含まれていた。韓国語の音象徴語は一般語彙と同じくらいの比率で有声阻害音 $/k, s, t, h, p/$ が頻繁に現れ、中でも $/p/$ は特に韓

国語の音象徴語に現れることが指摘されている（大坪 1989など）。から、ノード2の音象徴語の正答率が高かった理由は、韓国語に多く表れる子音分布が意味理解に影響を与えているという可能性を示唆するものであると考えられる。しかし、日本語の音象徴語と言語学的に類似した特徴を持つ韓国語を母語とする韓国人日本語学習者の方が、そうでない中国人日本語学習者よりもノード2の音象徴語の正答率が低かったのはなぜだろうか。これは、音象徴語に含まれている音韻に対して母語話者が抱くイメージは、言語個別的な側面が強いということが影響していると考えられる（Imai et al. 2008）。つまり、ノード2に含まれていた音象徴語は、韓国語よりも中国語と類似の音韻を多く持ち、その意味も類似していたことから、中国人日本語学習者は韓国人日本語学習者よりも高い正答率を示したのであろう。このことから、日本語の音象徴語と共通する言語学的特徴を韓国語の音象徴語が備えていても、音象徴語で意味がわからない場合には、その音象徴語と共起する特定の動詞が何かを理解するのは困難であることが示された。また、読解能力が影響していたノード4には、本研究で刺激語として選んだ音象徴語30語のうち15語が含まれていた。これは、音象徴語の意味理解のうち50%が読解に影響していることを示唆している。読解は、高度な認知活動であり、読解中に未知語を推測する際には、文脈からの情報など様々な知識が必要とされる（徳田 2006など）。日本語学習者が文脈の中で未知語として音象徴語に遭遇した場合には、一般的な語彙知識と同様に、他の語との意味的關係（共起関係）などについての知識を駆使しながら、その意味を推測し、文章の内容理解を進めていることが考えられる（Nassaji 2006）。すなわち、本研究の結果から、音象徴語の習得も読解に貢献していることが示唆された。

6. まとめと今後の課題

本研究では、韓国人日本語学習者と中国人日本語学習者の音象徴語の理解について、日本語学習者の第1言語に関わらず読解能力の高さが音象徴語の意味理解の高さに影響を与えていることや、韓国人日本語学習者よりも中国人日本語学習者の方が良く理解出来る音象徴語があること、さらには音象徴語の習得も読解に貢献していることを示した。韓国人日本語学習者に関しては、韓国語の音象徴語が日本語の音象徴語と言語学的に類似した形態的特長と基本用法を備えている場合、韓国語にある母音や子音が表す表現から意味を推測するようである。しかしながら、日本語の音象徴語と意味の關係は、両言語間の音の類似性から推測できるほど単純ではなく、音の類似性から意味を判断するのは困難であることが示された。従って、本研究は音象徴語の意味理解を、中国人日本語学習者だけでなく韓国人日本語学習者も含めた分析から捉え、その意味理解の言語差について読解力を含めた要因から比較することで、言語学的な特徴に焦点を当てるだけでは十分ではないことを示したといえる。なぜなら、本研究で用いた刺激語のうち半数の音象徴語が読解に影響を与えていたからである。

今後の課題としては、音象徴語の意味・用法の習得には、読解を通じた偶発的な語彙学習が役立つことが想定される (Nassaji 2003、2006、Pulido 2007)。そのため、日常のどのような場面や状況において、誰が何のために音象徴語を使うのか等を想定しながら例文を提示するというような、「文脈化」(川口 1996:70-73)を通しての音象徴語の語彙習得研究について、より実践的な検討が行われていく事が望まれる。また、多義音象徴語の語彙知識を「意味的ネットワーク」(Aitchison 1994:111)として捉え、共起動詞とうまく関連付けたり、意味の違いを識別したりする能力に焦点を当てた研究も必要である。

注) 本研究では韓国語の音象徴的な語彙群に対しても音象徴という言語学的な定義特徴に基づく「音象徴語」を用いることにする。

参考文献

- (1) 相原茂 (1976) 「現代中国語擬音語小辞典」『中国語』大修館書店
- (2) 秋元美晴 (2007) 「日本語教育におけるオノマトペの位置づけ」『日本語学』26、24-34.
- (3) 飯田香織・玉岡賀津雄・初相娟 (2012) 「中国人日本語学習者の音象徴語の理解」『日中言語研究と日本語教育』5、46-54.
- (4) エリノア、H. ジョーデン (1982) 『擬声語・擬態語と英語』国広哲彌 (編) 大修館
- (5) 王瑩 (2011) 「異なる日本語学習者による日本語のオノマトペに対する感覚評価」『日本語教育研究』57、65-82.
- (6) 芋坂直行 (1999) 『感性のこぼれを研究する—擬音語・擬態語に読む心のありか』新曜社
- (7) 大坪併治 (1989) 『擬声語の研究』明治書院
- (8) 笈寿雄 (1993) 「一般語彙となったオノマトペ」『月刊言語』22、38-45.
- (9) 笈寿雄・田守育啓 (2003) 『オノマトピア：擬音・擬態語の楽園』勁草書房
- (10) 鹿島央・橋本慎吾 (2008) 「韓国人学習者の日本語歯型破裂音における呼気圧・呼気流量について」『音声研究』12、76-86.
- (11) 角岡賢一 (2003) 「日本語の疑似オノマトペ」田守育啓・笈寿雄 (編) 『オノマトピア：擬音・擬態語の楽園』勁草書房、145-212.
- (12) 角岡賢一 (2007) 『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』くろしお出版
- (13) 川口義一 (1996) 「日本語指導の文脈化」北海道国際交流センター (編) 『日本語教育・異文化間コミュニケーション』69-91.
- (14) 財団法人日本国際教育支援協会・独立行政法人国際交流基金 (2008) 『日本語能力試験1・2級試験問題と正解』凡人社

- (15) 玉岡賀津雄・宮岡弥生・金秀眞・林炫情 (2011) 「韓国語を母語とする日本語学習者の語彙知識がオノマトペの習得に与える影響」『言語教育評価研究』2、36-41.
- (16) 田守育啓・ローレンス・スコウラップ (1999) 『オノマトペ：形態と意味』くろしお出版
- (17) 田守育啓 (2002) 『オノマトペ：擬音語・擬態語をたのしむ』岩波書店
- (18) 田守育啓 (2003) 「日本語オノマトペの統語範疇」筧寿雄・田守育啓 (編) 『オノマトピア：擬音・擬態語の楽園』勁草書房、17-71.
- (19) 徳田恵 (2006) 「読解における未知語の意味推測と語彙学習」『言語文化と日本語教育』増刊特集号、10-30.
- (20) 野間秀樹 (1998) 「最もオノマトペが豊富な言語」『言語』27、30-34.
- (21) 羽佐田理恵 (2005) 「福祉の視点から見た感情を表す音象徴語：その分析過程から導かれた問題点への取り組み」武内道子 (編) 『副詞的表現をめぐる』ひつじ書房、175-211.
- (22) 堀場裕紀江・山方純子・西菜穂子・李榮・田所直子 (2012) 「語彙知識の多面性はL2日本語読解にどうかかわるか」*Scientific approaches to language*、11、215-239.
- (23) 松本隆 (2006) 「日本語と韓国語の類似したオノマトペ」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』29、45-67.
- (24) 三上京子 (2007) 「日本語教材とオノマトペ」『日本語学』26、36-46.
- (25) 山本弘子 (1993) 『すぐに使える実践日本語シリーズ、1. 音とイメージでたのしくおぼえる擬声語・擬態語 (初・中級)』専門教育出版
- (26) 湯澤質幸・松崎寛 (2004) 『音声・音韻探究法』小池清治 (編) (シリーズ<日本語探究法>) 朝倉書店
- (27) 李殷娥 (1998) 「日本語と韓国語のオノマトペに関して」『国際開発研究フォーラム』10、73-88.
- (28) 李殷娥 (2000) 「日本語と韓国語のオノマトペに関する対象研究」『名古屋大学博士論文』
- (29) Aitchison, J. (1994) *Words in the mind: An introduction to the mental lexicon* (2nd ed.). Oxford: Blackwell (宮谷真人・酒井弘 (訳) (2010) 『心のなかの言葉：心内辞書への招待』培風館).
- (30) Hamano, S. (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Stanford, CA & Tokyo: CSLI & Kuroshio Publisher.
- (31) Hinton, L., Nichols, J., & Ohara, J. (1994) *Sound symbolism*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- (32) Hirose, M. (1981) *Japanese and English contrastive lexicology: The role of Japanese*

- “*mimetic adverbs*”. Doctoral dissertation, University of California, Berkeley.
- (33) Horiba, Y. (2012) Word knowledge and its relation to text comprehension: A comparative study of Chinese- and Korean- speaking L2 learners and L1 speakers of Japanese. *The Modern Language Journal*, 96, 108-121.
- (34) Huckin, T., Hayes, M., & Coady, J. (1993) *Second Language reading and vocabulary learning*. Norwood, NJ: Ablex.
- (35) Imai, M., Kita, S., Nagumo, M., & Okada, H. (2008) Sound symbolism facilitates early verb learning *Cognition*, 109, 54-65.
- (36) Iwasaki, N., Vinson, D. P., & Vigliocco, G. (2007) What do English speakers know about gera-gera and yota-yota? *Japanese-Language Education around the Globe*, 17, 53-78.
- (37) Kakehi, H. (1983) Onomatopoeic Expressions in Japanese and English *Proceedings of the XIHth International Congress of Linguists*, 913-918.
- (38) Kimizuka, S. (1967) A contrastive study of the Japanese structural device ‘Onomatopoeia + verb’ and certain English verbs *The journal –Newsletter of the association of teachers of Japanese*, 4, 12-16.
- (39) Lee, K.W. (2007) *Korean Onomatopoeia and Mimesis*. Soul: Han’guk Munhwasa.
- (40) Nagy, W. E., & Anderson, R.C. (1984) How many words are there in printed school English? *Reading Research Quarterly*, 19, 304-330.
- (41) Nassaji, H. (2003) L2 vocabulary learning from context: strategies, knowledge sources, and their relationship with success in L2 lexical inferencing, *TESOL Quarterly*, 37, 645-670.
- (42) Nassaji, H. (2006) The relationship between depth of vocabulary knowledge and L2 learners’ lexical inferencing strategy use and success. *The Modern Language Journal*, 90, 387-401.
- (43) Nation, I. S. P. (2001) *Learning vocabulary in another language*. New York: Cambridge University Press.
- (44) Pulido, D. (2007) The effects of topic familiarity and passage sight vocabulary on L2 lexical inference and retention through reading, *Applied Linguistics*, 28, 66-86.
- (45) Read, J. (2000) *Assessing Vocabulary*. New York: Cambridge University Press.
- (46) Shibatani, M. (1990) *The languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (47) Stæhr, L. S. (2008) Vocabulary size and the skills of listening, reading and writing. *Language Learning Journal*, 36, 139-152.
- (48) Toratani, K. (2006) On the optionality of to-marking on reduplicated mimetics in Japanese. 415-422. In Vance, T. J. & Jones, K. (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics* 14. Stanford: CSLI.
- (49) Toratani, K. (2007) An RGG analysis of manner adverbial mimetics. *Language and Linguistics*, 8, 311-342.